

市民に寄り添う活動家兼研究者：近代化産業遺産活 用の事例より

永吉, 守
久留米高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/2341051>

出版情報：九州人類学会報. 35, pp.30-45, 2008-07-12. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

研究ノート

市民に寄り添う活動家兼研究者 —近代化産業遺産活用の事例より—

永吉 守（久留米高専・福岡工大非常勤）

本稿は、筆者が三池炭鉱の近代化産業遺産を保存・活用するNPOに関与してきたことについて、実践家兼研究者という立場から、近代化産業遺産をめぐる様々な関係性の中での実践事例の提示とその学問的検討を試みたものである。

はじめに

筆者は、文化人類学を中心に社会学や日本民俗学等の成果を用いながら、筆者が生まれ育ち在住している福岡県大牟田市・熊本県荒尾市を中心とした地域で、旧三井三池炭鉱閉山後における近代化産業遺産の保存・活用をNPO活動として実践してきた。本稿¹⁾では、人文・社会科学系および産業考古学の学問的状況のなかで、筆者がこうした実践を行ってきた動機目的を明らかにし、実践の記述をとおして新たな研究の方向性をめざしたい。

I 人類学・社会学等の学問における実践

本稿では、筆者が専門領域とする文化人類学、および文化人類学と近接領域である、社会学、日本民俗学…等の人文社会科学系（一部社会科学を含む）の学問分野のなかで、質的なフィールドワークを行う学問を、ここでは便宜的に「フィールド系人文学」と総称²⁾することにする。

また、本稿における「実践」の用語は、主としてブルデューが提示し[ブルデュー 1988, 1990(1980), 田辺 2003]、社会学や文化人類学の文脈で強調されがちな、プラティーク的意味、つまり、日常におけるしばしば無自覚・無意識的な、再帰的に構築されていくような慣習的行為の

概念で使用しているわけではない。確かにそうした概念をもある程度包摂しているが、むしろ、プラークシスの意味、あるいは日本語として広く一般に使用している「実践」、つまり文字通り「実際に何らかの行為・行動を行なう」という概念で使用している。フィールド系人文学における開発や応用の分野においては、後者の意味合いで実践という用語が使用される傾向にあり³⁾、筆者もこのような意味合いで使用するものである。したがって、本論における「実践」は意識的・企図的なものを多く含んでいる。そのうえで「誰が何を実践するのか」ということに筆者は注目したい。

フィールド系人文学において重視されるのは、フィールド、つまり調査対象地域社会に研究者が比較的長期にわたり、一次データ（インタビュー、参与観察、質問紙法、実測等）を中心に収集し、そこから得たデータや知見を用いながら、調査者がたてた主題・問題について明らかにする、といったフィールドワーク手法であろう。

しかし、「その調査が現地（＝フィールド内部）にとって何の役に立つのか？」とか「何のためにその調査が行われるのか？」といった、現地の市民（住民、生活者）側からの調査研究の目的・意図への疑問に対して、研究者が、現地の人々にその疑問に対して正面から応答することは少ないのが実情である。「フィールドにおける人々の生活様式から、人類の多様性を示す」とか「〇×学における△□理論の実証・反証、理論補完」、などと市民に学問内部の目的を伝えたところで、おそらく現地の市民にとって生産的な意味はほとんど見出せないに等しいであろう。多

くの場合、現実的には研究者から「この調査によってこの地域の問題点を明らかにしたい」といった回答をするのが精一杯ではないだろうか。現地の市民にとっては、多くの研究者はいわゆる「学者先生」であって、多くの研究成果は、何の実益ももたらさないか、ある種の「調査地被害」であるか、もしくは、単に問題点を指摘するのみであって、「では、どうやってその問題点を解決すべきなのか？」や「我々は、具体的に何をどのようにすればその問題を解決できるのか？」あるいは「問題解決のためにどのような組織づくりが必要か？」などというフィールド内部の人々の切実な「問い」にある程度でもいいので答えるような研究・論文・実践は非常に少ないのが現状⁴⁾であろう。

無論、フィールド系人文学はこのような問いを無視し続けてきたわけではない。文化人類学では、近年になって学会誌『文化人類学』、およびその旧称『民族学研究』において、「大学—地域連携時代の人類学」（72巻2号）や「表象・介入・実践：人類学者と現地のかかわり」（70巻4号）、「人類学 at home」—日本のフィールドから—（65巻4号）など、近年の特集および論考の中でフィールドワークと現地における実践、特に国内においての実践および調査研究について議論が深まってきた⁵⁾。また、日本民俗学の研究者の中には、地域づくりを現地の人々とともに実践した宮本常一をはじめとして、地方の行政担当者、公立私立の博物館スタッフ、郷土史家などが多く含まれており、学会誌においても1999年の『日本民俗学』220にて「小特集 シンポジウム「現代社会と民俗学の実践」」が組まれている。

しかしながら、フィールド系人文学の研究思潮の大勢は、現地の問題を詳細にとらえてはいるものの、現地の市民の問題解決の方向を指し示した論文はごく少数なのが現状である。そして、問題解決を志向する論考の多くには、開発という、往々にしてトップダウン的でありきわめ

て政策的な色彩の強い研究傾向をみることができるとも現状である。また、開発としての問題解決に言及した論考の多くは、開発をアカデミックな職業として、もしくは副業として担っている者の立場・視点に立ったものだといえよう⁶⁾。

ところで、筆者にとってのフィールドは、フィールド系人文学における日常的な意味とはやや異なっている。筆者のフィールドである大牟田・荒尾は確かに筆者の調査地ではあるが、同時に出身地であり、現在もそこに居を構えているため、大雑把に言えばフィールドそのものが生活空間であるといえよう。つまり、筆者は調査地に生まれ育ち現地の市民として在住しつづけているという意味で、ネイティブ研究者（ホーム研究者）の属性を持っているといえよう。むしろ、「ネイティブ研究者とは誰か？」という問題を考えれば、単に現地出身・在住だからといって無条件にネイティブ研究者である、と言い切れるものでもないだろう[加藤恵津子 2006, 山本真鳥 2006, 中西 2003]。実際、筆者が調査対象としてきた三池炭鉱の歴史や労働者の生活史は、筆者の生活領域とは、時間的にも空間的にもかなり異なったものであった。筆者は、1993年頃から三池炭鉱の社会—文化的事象に関心を持って、炭鉱労働者家族のライフヒストリー研究などを行ってきたが、1997年3月の三池炭鉱閉山によって、筆者がかつて調査対象としてきたものは、その多くが歴史性を帯びた過去のものとなっていったと同時に、それまで筆者がフィールドと思ってきた場が消失し、自らの生活空間に客体的な過去として立ち現れてきたように感じるようになっていった。そして、後述するように、筆者はその生活空間のある自治体内外において、地域の問題に即した問題解決、具体的には、まちづくり型のNPO法人を自ら設立し、地域内外での活動を自ら行っている実践家となった。つまり、筆者は、現地出身・在住というよりもむしろ、そうした過去を現地で取り扱う問題解決型の実

実践家という意味において「ネイティブ」であるといえるだろう。加えて、本稿のように、その実践活動について記述し、分析する、フィールド系人文学の研究者でもあり、同時に、単に実践を研究するだけでなく、ワークショップ手法やエコミュージアム構想など、学問的知識や研究手法を実践に活かす応用的側面も筆者には存在している。

以上のことから、筆者は、問題解決型実践家であり、(現地の実践家という意味での)ネイティブ研究者であり、それらを記録・記述するフィールド系人文学の研究者であり、学問的知識を実践にフィードバックする学問応用実践家である、という4つの相異なる、時には相反する属性ないし立場を同時に持ち併せている。そういう意味において、筆者のこうした研究・実践手法は、単に開発という立場のみからみた研究とは異なっているのである。

筆者は、承前のとおり「実践」という用語の学問的多義性があることを認識しているが、本稿では、日本語の一般的な意味合いにおいて、実践の主体別に、次のように実践研究を類型化できると考えている。

- a) フィールド内部の人々による、現地の人々の実践の参与観察やインタビューなどによる質的研究。地域で行われている実践について、その実践を調査対象にする。この場合は、研究者はあくまでも「参与者」もしくは「観察者」とどまる。
- b) フィールド調査実践そのものを研究対象とした研究。この類型には、フィールド調査実践が伴う研究者の「一人一人の日常的営み自体を問う」[斉藤 2000:23]ような研究、研究者が一方的にあるいは単声的に他者を表象してしまういわゆる「ライティング・カルチャー」問題や「文化を語る」権力問題への意識から注目されるようになった、個人へのイ

ンタビューやライフヒストリー調査による対話的共同作業やその共同作業自体を描き出すことによって調査実践そのものを明らかにするような研究[例えばクラパンザーノ 1991(1980)]、学問の持つ歴史性・政治性のあり方によっては存在したかもしれない民族誌の可能性を評価する研究[例えば、クリフォード 1981(1980), 2003(1988), 太田 1998, 2001 など]なども含まれよう。

- c) フィールド内部の人々の実践に参加者として、もしくは参加型開発アプローチのなかでの地域住民と開発者をむすぶコーディネータとして、あるいはネイティブによる内発的發展[鶴見 1989]の実践に実際に参画する場合。基本的な研究の方向性は a) を基本とするが、実際に実践の内容に参画するという意味においては当事者である。しかし、あくまでも、当事者としての役割、もっと具体的に言えば、研究者の実践参画の場における他の実践者に対しての発言や主張はきわめて限定的であり、発言・主張がなされた際に、それは他の実践者からみて開発者としての権力行使とみなされる場合。
- d) 研究者自らが「地域の知識人」の役割を果たしながら、ネイティブによる内発的發展の実践を地域との絶え間ない対話の中で率先しながら行なう場合。この場合は、c) を機軸としながらも、研究者自らが学問的見地も含めて積極的に自ら発言し、主張していく。ただし、その場合の発言・主張はあくまでも一実践者としてのものであり、開発者と多くの他の実践者からみなされない必要がある。したがって、その地域に出身地や在住地として長年入り込み、その地域の事情に精通することが望まれると同時に、上記 b) の視点も

必要となる。さもなくば、長年、フィールド系人文学の批判対象となってきた、研究者によるフィールドの改変や調査地被害という問題に直結する⁷⁾ことになるだろう。したがって、その実践は、あくまでも共同(協働)実践者たる地域の人々との絶え間ない対話・交渉と様々な歴史的過程と権力関係の考察を前提として行われるべきである。

ただし、指摘しておきたいのは、筆者の試みた類型化はあくまでもモデルに過ぎず、実際の研究者の位相は明確にa)b)c)d)と境界付けられるものでもないこともまた事実である。筆者の実践は、明らかに上記d)を基調としたものであり、これまでのフィールド系人文学では批判的であった、学問の応用的側面に足を踏み入れるものである。

II 近代化産業遺産の認識をめぐる

1 遺産と近代化産業遺産

まず、近代化産業遺産の定義づけの前に、遺産についての本稿での定義を述べておきたい。日本語の「遺産」は、残存、保護および文化財行政に重点をおいたニュアンスが強いものに対して、英語の“Heritage”は、次世代への伝承・伝達、公共的活用といったニュアンスが強い[矢作 2004: 179-180]。また、遺産の言説的側面も指摘されている[SMITH 2006: 4]。そこで本稿では、「遺産」を「人間の文化的営みの結果として、もしくは自然環境として次世代に伝承ないし活用される(もしくは伝承ないし活用されるべきと人々によって考えられている)事物であり、それ自体ある種の言説として構築されるもの」と定義づける。そのうえで、「遺産」の大きなサブカテゴリーとして「文化遺産」と「自然遺産」が存在し、さらに、ゆるやかな「文化遺産」概念の中に「近代化産業遺産」が包摂されるものと位置づけたい。また、こうした

文化遺産や近代化産業遺産がある一定の空間に群をなして存在している場合、それを景観の視点から「文化的景観」や「近代化産業遺産景観」(一般には「産業景観」とも呼ばれる)ともとらえることもできよう。なお、文化遺産についてのフィールド系人文学からのアプローチでしばしば問題とされる、ノスタルジアやオーセンティシティについて[アーリ 1995(1990), WALSH 1992, SMITH 2006, 岩本(編) 2007 など]は、稿を改めて論じることにはしたい。

「近代化産業遺産」の呼称については、類似の概念で様々なものが提示されている。例えば「産業遺産」「近代化遺産」「近代産業遺産」「近代土木遺産」…などであり、研究者の定義づけによってそれらの用語の使用法も微妙に異なっている。こうした遺産の保存と活用を考える国際会議、TICCIH(国際産業遺産保存会議)では、「ニジニータギル憲章」の中で“Industrial Heritage”(直訳すれば「産業遺産」となる)を次のように定義している。

「産業遺産の定義: 産業遺産は、歴史的、技術的、社会的、建築学的、あるいは科学的価値のある産業文化の遺物から成る。これらの遺物は建物、機械、工房、工場及び製造所、炭坑及び処理精製場、倉庫や貯蔵庫、エネルギーを製造し、伝達し、消費する場所、輸送とその全てのインフラ、そして住宅、宗教礼拝、教育など産業に関わる社会活動のために使用される場所から成る。産業考古学は、産業工程を目的とし、あるいはその結果作られた記録、人工遺物、層序、建造物、人間の居住地、自然景観及び都市景観など、有形、無形の全ての証拠を研究する学際的方法である。それは過去と現在の産業に関する理解を高めるために、最適な研究方法を用いる。産業考古学が主に関心を寄せる歴史的時代は、18世紀後半の産業革命の発祥時期から現在にまで及

び、又産業化以前及び産業化初期の起源も研究する。さらに、技術史に含まれる作業及び作業技術の研究にも及ぶ」[産業考古学会 2003 (online)]。

筆者としては、上記ニジニータギル憲章をふまえたうえで、こうした遺産について、シンプルに“Industrial Heritage”の直訳である「産業遺産」の用語を使用したいところである。しかしながら、本稿では、主に三池炭鉱関連の施設等を取り上げて論を進めるため、化石燃料を使用しない動力による、農林水産業・商業・家内手工業に関する産業遺産（例えば水車や民具やその他の道具類）や、第一次産業の生業に基づく「文化的景観」（例えば棚田など）、あるいは主として近世期までに形成された商家群や宿場町などの産業遺産と、本稿の中心である化石燃料使用を中心とした炭鉱や製鉄、工場などの近代的鉱工業を中心とした産業遺産との特質を区別するため、あえて「近代化産業遺産」の用語を使用したい。この場合、炭鉱や製鉄所、工場等の諸施設のほか、それらに関連した土木建築遺産、交通遺産、産業と関連の濃い近代化遺産、産業にまつわる社会資本や産業に関連した文化的事象等も含むものとする。なお、日本では、1990年、文化庁が全国調査である「近代化遺産総合調査」を実施した頃から、にわかに近代化産業遺産が注目され始め、近代化産業遺産が国の文化財指定となっていく。また、1996年「文化財保護法の一部を改正する法律」により、「文化財登録制度」が導入され、近代化産業遺産が国の文化財に登録される例が続出している。近年では産業考古学、都市景観の視点から近代化産業遺産が報道・出版、写真展などで採りあげられ、ある種の廃墟趣味も手伝って、近代化産業遺産に関する著述も増加している[例えば加藤康子 1999, 2007, 砂田 2005 ほか]。近年ではフィールド系人文学から文化遺産の保存・活用実践と文化資源、ツーリズム、まちづくり・地域おこし、グ

ローバリゼーション、ナショナルリズムとの関係に関する議論が盛んであり[DICKS 2000, SMITH 2006, 岩本 2007, 岡田 2004, 荻野 2002, 西山・池ノ上 2004]、その中で近代化産業遺産保存のプロセス研究[山本理佳 2006]や近代化産業遺産についての人文・社会科学からの理論化[井上・野尻 2004, 幸田 2006]もみられるようになった。さらに、2007年には、近代産業ではなくまた産業遺産が前面は出ていないが「石見銀山遺跡とその文化的景観」がユネスコ世界文化遺産に登録され、「富岡製糸場と絹産業遺産群」がユネスコ世界文化遺産暫定リストに掲載され、それらと連動するかのようになり経済産業省が「近代化産業遺産群 33」として 33 群 575 件の「近代化産業遺産」を認定している。

2 近代化産業遺産の生活者の認識と愛好家・研究者の認識

近代化産業遺産は、一般にその他の文化遺産と比較してその価値が認められにくく、したがってその保存・活用も比較的困難となっている。それは、多くの近代化産業遺産について、研究者でも愛好家でもない、広く一般の人々の最大公約数的な歴史的・文化的価値と愛好家や研究者との認識の間にズレが生じていることによるものであろう。その要因については次のような理由が考えられる。

まず、一般の人々の多数の認識における審美観においては、近代化産業遺産は寺社仏閣、美術工芸品といったものと比較してその価値づけが充分になされてこなかったことが挙げられる。例えば、文化庁の指定する国の重要文化財(国宝を除く)で考えてみると、近代工場跡の赤レンガ建造物や鉄骨橋梁などにいかにも造形美を見出そうとも、寺社仏閣、美術工芸品と比較して近代工場跡により高い価値を置く人々はまだまだマイノリティであり、そうした人々は、産業考古学研究者を含め、ある種の愛好家とみなされる傾向にあるだろう。

次に、日本の近代化産業遺産の場合、遺産そのものの歴史的経年が最古でも150年ほど前と比較的新しいことが挙げられる。日本の歴史教育が学校教育および社会教育において、近世までの歴史に偏重していることによって、一般の人々が近代に歴史的価値を置く、注目するといった状況には程遠い現状がそこには存在する。

また、確かに近代化産業遺産は近代化の過程を示す遺産であるが、その近代化の過程そのものが、欧米の技術や思想的側面の導入・移転・解釈に偏っていたという歴史的事実も近代化産業遺産が今ひとつ注目を集めることが無い理由に挙げられよう。そして、我々はその近代化の末に達成された様々な物質的・経済的な恩恵を受けて日常生活を送っているため、近世までの生活文化や遺産と比較した場合に日常的であるがゆえに、もの珍しさをそれほど感じない傾向にあるとも考えられよう。

それから、近代化産業遺産の場合、近代化のひずみとでもいうべき、近代がもたらした「負の側面」—例えば、労働者への搾取であったり、囚人労働であったり、植民地支配や戦時におけるマイノリティの徴用であったり、労働争議であったり、深刻な事故や公害、職業病であったり—が強く連想されることもその価値が認められにくい一因であろう。特に現地の市民には、マスメディアによって繰り返し強調される「負の側面」への拒否感が根強く存在することも事実である。

さらには、近代化産業遺産は、確かに文化遺産の一部ではあるが、上記の一般的認識と愛好家の認識とのズレからも明らかであるが、日本民俗学等で議論⁸⁾されている、村落景観や棚田などの農業景観など、近代化産業遺産以外の文化遺産・文化的景観とは異なった性質を持っているものと考えられる。近代化産業遺産のイメージは観光人類学などで良く例示される楽園イメージでもなく、日本民俗学で論じられる日本の原風景イメージ

でもないのである。楽園イメージや日本の原風景イメージの中に対置されているイメージは、西洋近代社会をモデルや基本とした現代社会であり、楽園や原風景のイメージが文化遺産という形で対象化されるのであるが、近代化産業遺産の場合は、近代—現代のある種の連続性の中にノスタルジアを導入するか、もしくは微小な差異をあえて見出し、対象化するといった、ある種の複雑なイメージ形成過程をたどるものと考えられる。世界に先駆けて近代化を達成し、またその保存・活用において「観光のまなざし」のひとつであるノスタルジアを巧みに動員した英国の事例[アーリ1995(1990):186-239など]はあるが、こうした価値観は日本ではまだマイナーであるといわざるをえない。よって、日本における近代化産業遺産の価値付けについては、他の文化遺産と比較して生活者から、あるいはフィールド系人文学の研究者からさえもその価値が認められにくい、ということがいえよう。

加えて、日本において、近代化産業遺産の研究と保存について研究し、その価値付けの中心的役割を果たしている産業考古学の分野では、どちらかというとその技術史あるいは土木・建築史的側面、および考古学的側面から価値を「発掘」することが中心となっている。むしろ、これらのことはきわめて重要であり、産業考古学を中心とした学問が近代化産業遺産の保存・活用にむけた学術的根拠や基礎資料に貢献してきたことは十分に認められよう。しかしながら、それらの学問が、「発掘」された事物とその価値づけにおいて、生活者に向けた具体的でわかりやすい価値付けを提示し、普及しながら、具体的な保存および活動につながる行為を果たして中心にしてきたか、というと、大きな疑念を抱かざるを得ない。むしろ、産業考古学会は「アレはすばらしい、学術的価値もある、ぜひ保存すべきだ」と述べるだけの「保存・活用への実行を伴わない語り」や、諸事情により

解体撤去されていく近代化産業遺産を「アレが解体された、ソレも消失予定だ、ああ、残念だ…」という、消極的な消滅の語り、もしくは解体撤去される遺産の保存への緊急避難的声明やレクイエムの記述に終始しているのが現状である。筆者は、産業考古学会が実施している「推薦産業遺産」リストアップという作業にとどまらず、価値付けをさらに積極的に行い、その価値付けを地域生活者にまで普及していき、地域生活者とともに市民活動を展開し、所有者や行政に理解を深めてもらい、保存・活用を積極的に推進する段階に来ているのではないかと考える。

文化遺産を含む領域を対象としてきたフィールド系人文学においては、学問としてのある種の客観性にたてば、筆者が主張するような形で、研究者がドグマ的に地域生活者に対する価値の付与と普及にかかわることはむしろ有害であり⁹⁾、価値付けとその普及の根幹は地域の活動にゆだねられるべきであると通常考えられている。もちろん、筆者もそれは首肯しており、重要で尊重されるべきことであろう。しかしながら、筆者としては、産業考古学的立場からその価値を地域生活者に普及させるのみならず、地域生活者の文化的な利益に資するような地域活動実践のひとつとして近代化産業遺産をとりあげ、その保存・活用をフィールド系人文学の観点から実践することも重要だと考えている。

3 大牟田・荒尾の近代化産業遺産

ここで、筆者の調査・実践地である大牟田・荒尾に存在する三池炭鉱を中心とした近代化産業遺産の主要で代表的なものについて記述するが、その詳細については別稿ないし参照文献等を参照いただきたい[永吉 2003、大牟田市石炭産業科学館(リーフレット)、経済産業省 2007(online)、大牟田市役所主査・主任会 2002、砂田 2005]。

三池炭鉱の近代化産業遺産で最も特徴

的なのは、炭鉱の坑口施設と炭鉱関連産業・コンビナート施設が近代化産業遺産景観(産業景観)や都市社会基盤といった施設群として存在している、という点である。

そうした施設群の中には国によって文化財および史跡に指定されている、宮原坑跡(大牟田市)、万田坑跡(荒尾市)、炭鉱の巻揚機動力のためのボイラ煙突が国有有形文化財に登録されている宮浦坑跡(大牟田市、宮浦石炭記念公園)、建造物が国有有形文化財に登録されている旧三川電鉄変電所(大牟田市、民間会社が買収し本社屋として活用)、明治から昭和初期の三池炭鉱労働において行なわれた囚人労働を示す三池集治監レンガ塀・石垣跡(大牟田市、福岡県指定有形文化財)、三池港付近の三井系娯楽施設として建てられた三井港倶楽部(大牟田市指定有形文化財、民間会社が買収しレストラン・結婚式場として活用)がある。

また、行政による指定・登録の物件以外にも、旧炭鉱会社等の所有のもので、近代化産業遺産群を構成するもので特に重要な物件として、三池港、および三池炭鉱専用鉄道敷・電気機関車を挙げておきたい。

三池港は 1908(明治 41)年に築かれ現在でも稼動している閘門ドック式人工港である。ドックには水位調節用の閘門(ロックゲート)とドック内水圧調整用補助水堰(スルースゲート)を備え、ドック内には蒸気動力浮きクレーン大金剛丸などがある。三池炭鉱操業時は三池産の石炭を国内・海外に運搬する港湾施設として重要であり、同時に炭鉱産業関連社会資本の中核的施設であり、また現在でも物流港湾施設として重要な役割を果たしている。

三池炭鉱専用鉄道敷は、炭鉱と炭鉱コンビナート用に敷設されたものであり、それは大牟田・荒尾地域の都市空間を「炭鉱のまち」たらしめた設備であり、閉山時にその大部分が撤去されてはいるが、廃線跡として「炭鉱のまち」であった景

観を形成する中核として最も特徴的かつ重要なものである。また、その一部は三井化学専用鉄道として現役稼動している。1900年代初頭に製作され、閉山時まで現役稼動していた電気機関車4台も大牟田市教育委員会により保存されている。

その他にも、三池炭鉱閉山時の人員昇降坑口である有明坑立坑櫓（みやま市内）、七浦坑跡、勝立坑跡、宮原坑付近の鉄骨橋梁、炭鉱社宅と類似形式の炭鉱関連工場従業員用の社宅建築等々、多数の三池炭鉱関連の近代化産業遺産と考えられるものが存在しているが、企業所有の不要な工場跡・工場事務所跡や地域再開発に伴う土地建物の売却・解体などにより徐々に姿を消していつているのが現状である。

III 保存・活用の実践とその経緯

1 活動の動機ときっかけ

本稿くはじめに>で述べたとおり、筆者は、三池炭鉱のあった地の一部、福岡県大牟田市に生まれ育った。そして、1993年頃より三池炭鉱の労働者とその家族に対して、インタビュー取材を行い、彼らの生活史を文化的事象として追いながら論文を作成してきた〔永吉 1998〕。1980年代前半頃まで、この地には「炭鉱のまち」特有の様々な雰囲気、つまり炭鉱やその関連産業の労働者とその家族を中心とした生活が醸し出すものが存在した¹⁰⁾。それは、「社宅」と呼ばれる集住型居住の相互扶助的生活様式や各家庭で使用された石炭風呂を焚いた際に発生する硫黄臭や大牟田・荒尾を環状に囲む専用鉄道が醸し出す景観などであった。しかし、それらは時を経るにつれて次第に薄れていった。また、炭鉱が存在したことにより、いくつかの不幸な出来事もまたこの地に存在した。囚人労働、女性労働、いわゆる中国大陸や朝鮮半島の人々に対する徴用、捕虜の徴用、三池産の石炭の船舶積載に従事した与論島移住者の低賃金労働と差別、それから、三池争議、炭じん爆

発事故などである。こうしたことに関わる事項は、事あるごとに、著作物となり、マスコミ報道され、表象され続けてきたのもまた事実である。端的に言えば前述の「負の側面」としての表象である。

そして、1980年代から顕著になってきたことは、炭鉱や工場の相次ぐ合理化・縮小・廃止により労働や施設が集約され、移転していくとともに、街の活気が失われていったことである。特に、1990年代以降顕著になり1997年の閉山以降加速した現象として、長屋形式の社宅での相互扶助的な共同生活が消え、折からの全国的な不況の影響ともあいまって、炭鉱や工場由来の様々な商品の受発注が減少することにより多くの商店が閉鎖し、旧来の商店街は「シャッター通り」となり、若年層は福岡市など大都市に職業や便利な生活を求めて人口流出し、工場跡や社宅跡の土地は更地になり、一部は郊外型ショッピングモールへと変容し、日本の他の都市と大した相違のない均質化された空間が広がるようになった。筆者は閉山後、こうした一種のジェントリフィケーションとも呼べるような状況は、この地の「顔」を消去し、人々の記憶から「炭鉱」という存在を消去し、この地の歴史やその文化まで消去・破壊しているのではないかと次第に確信するようになっていった。

そのような状況の中で、筆者は、三池炭鉱に関連するウェブサイト「異風者（いひゅうもん）からの通信」を核にして出会った数名の仲間とともに、この地域の「炭鉱のまち」としての心象風景、景観、記憶といった歴史性や文化的な事象を活用しながら保存していく、エコミュージアム志向のまちづくり型NPO、「大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」を2001年10月に結成したのである。

大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブの活動理念は、定款にも示しているが「炭鉱のまちの風景・心象を次世代へ継承する」ことである。また、その具体的なイメージとして、「目指すは、まち丸ごと博

物館！」というエコミュージアム構想を提示している。

2 活動の概要

大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブでは、近代化産業遺産を活用しながら保存するための様々な活動を実施しているが、その中で最も特徴的なものは「まち歩き」と「Tanto Tanto ウォーク」である。まず、「まち歩き」では炭鉱のまちファンクラブのメンバーや一般参加者も交え、近代化産業遺産群のある場所まで実際に歩き、ゴール地点では、KJ 法を応用した付箋紙を地図上に貼っていく形式のワークショップを開催し、近代化産業遺産はもとより、その道中の新たな発見や気づいた点を発表しあいながら、ウォーキングルートを検討し、ルートマップを作成する。次に、そのルートマップを生かしながら、「Tanto Tanto ウォーク」というかたちで我々が参加者とともにガイドをしながら歩く、というツアーを催行している。歩くことにより、それぞれの近代化産業遺産間の経路（ルート）に存在する風景や心象を五感で自然に感じることが出来ることも目論んでいる。

さらに、我々は、「Tanto Tanto ウォーク」のなかで、近代化産業遺産見学やその経路のなかにおいて、例えば、坑口施設内を見学する際に、実際に使用されたヘルメットとキャップランプを参加者に着用させて炭鉱労働者の雰囲気を感じてもらったり、坑口施設の解説を元炭鉱労働者に思い出を交えて語ってもらったり、与論島出身者の集会場を経路上に組み込み、与論島出身者に三味線と唄の演奏を披露してもらったり、万田坑施設で行なわれたイベントに協賛し万田坑施設内でのギターコンサート開始時刻に合わせてウォークのゴールを設定したり、三池炭鉱専用鉄道の廃線跡を部分的に経路に組み込んだり、昼食・休憩時間の最後に、炭鉱にまつわるクイズ大会を催したり、といった仕掛けを設置している。このようなさまざまな仕掛けは、かつてこ

の地に炭鉱と関連工場が存在し、そこにはマイノリティを含むさまざまな人々が存在し、彼らの文化が交錯し、この地特有の風景と心象を再想像させる事を目論んでいる。また、この仕掛け自体が、この地にかつて存在した、決して上品ではないが人間味あふれる生活文化、喧騒、活気—つまり、「炭鉱のまちの風景・心象」を日常性と非日常性が混在する現在の大牟田・荒尾にとりもどす実践ではないかと考えている。そして、そうした実践は、グローバル化の中で様々な文化的背景の人々が共存していくことが求められる現代において、生きた教材となるのではないだろうか。

その他にも、万田炭鉱館の指定管理者受託により、元炭鉱 OB や万田坑周辺住民による万田坑ガイドを行なっているほか、大牟田市石炭産業科学館企画学芸スタッフの業務委託の受託、修学旅行等を対象としたガイドツアー、近代化産業遺産を保存するための署名活動・清掃活動、近代化産業遺産について話し合うシンポジウムや学習会、会報発行およびウェブページやメーリングリスト運営、月一回の定例会も行なっている。また、近年では、万田坑および宮原坑が国重要文化財・史跡であることから、文化庁建造物課による建造物保存活用のモデル助成事業などを受託し、コンサートや地域住民の活用ワークショップなども開催している。

このような実践の中では、筆者が研究で得た学問的知識を実践の際の視点として使用していることも多い。例えば、前述の与論島出身者による三味線演奏は、与論島出身者が移住を通して経験した様々なできごとの中で出身地（あるいはルーツ）を示す文化的事象であるが、筆者はその三味線演奏をウォーキングツアーの途中で披露してもらおうという形で採りあげている。たしかにそれは、一見、筆者の学問的興味による、与論島出身者の勝手な表象や観光芸能としての安易な文化の切り売りともみえるかもしれない。しかしながら、あくまでも三味線演奏は与

論島出身者の集会場にて日常的に三味線の練習している様子をウォークツアーの集団が寄り道的に探訪し、見せてもらう、といった程度のものであり、観光芸能化するような仕方ではない。それは、与論島出身者との十分な対話のもと、当地に与論島出身の人々が多数在住して、大牟田・荒尾の多文化的状況を示すためのものと位置づけており、それは、立坑櫓やコンビナート施設や鉄道・港湾施設、住居跡、炭坑節などと同様に、「炭都の風景・心象」のひとつだと位置付けている。

3 九州伝承遺産ネットワークと世界遺産、および「世“間”遺産」

筆者は、上記のような実践を実施していくうちに、同様の取り組みを行なっている他地域の活動を知るようになった。そのような中で、ある一定の地理的まとまり、すなわち九州内での連携を考えるようになった。特に、産炭地であり、特徴的な産業景観を遺す端島(軍艦島)の保存活動にとりくむ「NPO 法人軍艦島を世界遺産にする会」などは、他地域との連携を含め積極的に活動を行なっており、彼らの九州単位での連携をめざすネットワーク構想に筆者も賛同した。そこで、2006年2月、九州の遺産を伝承する市民活動団体、九州産業考古学会、学識経験者、九州内のシンクタンクなどで「九州伝承遺産ネットワーク」を組織[幸田2006]し、筆者が副会長に就任している。折しも、近代化産業遺産・産業観光の普及活動に携わっている実業家や近代化産業遺産を所有する自治体、および経済産業省が連合し、「九州・山口近代化産業遺産群」をユネスコ世界遺産の暫定リストに記載すべく活動を始めており、「九州伝承遺産ネットワーク」として、その後方支援を行なうことにもなった。

このような動きの中、九州伝承遺産ネットワークのメンバーの中で興味深い概念が提案された。それは「世界遺産」の名称をもじった「世“間”遺産」である。この「世間遺産」はユネスコ世界遺産が

日本でブームとなった2000年代に同時発生的に複数の提唱者がいるが、九州伝承遺産ネットワーク所属である、NPO 法人まちづくりネットワークかごしま探検の会の東川隆太郎氏が提唱した概念をもとに、筆者自身がその概念を精緻化し、九州伝承遺産ネットワークの「伝承遺産」のより具体的な姿として「世間遺産」という概念を使用している。

その「世間遺産」概念とは、「先人の知恵や技術など、次世代に伝承すべき遺産の中で、地域の人々(市民)が自ら発見し、地域の宝物として価値付ける遺産。「世界遺産」と対等な価値を持つ」¹¹⁾というものである。

この「世間遺産」という概念は、決してユネスコ世界遺産暫定リスト入りをめざす「九州・山口の近代化産業遺産」の活動を否定するものではない、むしろその活動を補完するものとしてとらえられるのであるが、ユネスコ世界遺産のようなグローバルかつナショナルな価値を無批判にありがたがり、観光活用等による地域の経済活性化のみが喧伝される、という、日本における「世界遺産ブーム」に警鐘を鳴らすものでもある。地域住民が置き去りにされた日本のユネスコ世界遺産の現状とその弊害は、日本民俗学などにおいて複数の研究者が指摘しているところである[岩本(編)2007 など]が、我々はユネスコ世界遺産として登録されるかどうかに関わらず、「世間遺産」(あるいは「伝承遺産」として、地域の人々が伝承していく遺産、という価値を大切にしていきたいと考えている。

IV 市民に寄り添う NPO 活動・研究者

「大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」は、NPO 法人として運営しているが、筆者を含め、アカデミズム従事者も運営担当者に多い。そういう意味では、他の福祉系の NPO や一般的なまちづくり団体と比較して、近代化産業遺産に関する愛好家の集団と見られる傾向にあるかもし

れない。もちろん、それは我々の運営の属性だけでなく、石炭産業や近代化産業遺産への理解・浸透がまだまだ一般の生活者に対して不十分であるという要因もあるだろう。したがって、我々は、実施する各種イベント中で、出来る限り現地の市民を含む一般の人々に近代化産業遺産を知ってもらうことを企図している。

その一例として、2007年1月27日に実施した「宮原坑草刈大作戦&ワークショップ」が挙げられる。このイベントは、宮原坑跡と三池炭鉱専用鉄道敷を含む宮原坑の周辺について、草刈と清掃を通して「炭鉱のまち」の景観保全をはかり、同時に見学とワークショップによって活用を考えよう、というものである。実施にあたっては美・まちづくり会議および福岡県による「わがまちウォッチングワークショップ」助成を受けた。本ワークショップ実施にあたっては、宮原坑跡の周辺住民を対象に、周辺町内会のネットワークを利用してチラシを配布した（本ファンクラブのイベント告知の大半は、市内を中心とした新聞報道や市広報誌掲載に頼ることが多い）。当日は、気温が低く天候も曇天だったが35名の現地の市民が参加。50歳代以降の男性が中心であり、多くがチラシ配布地域の人々であり、半数以上が本ファンクラブのイベントに初参加であった。筆者は本イベントの企画から全体の司会までを務めた。

当日は、まず、全体説明の後、午前中に雑草・雑木で覆われた宮原坑跡の国重要文化財施設の保全、周辺からの立坑櫓を望む景観の向上を目的として草刈を実施した（写真1）。草刈はエンジン草刈機も併用したが、草刈鎌による手作業を基本としたので、参加者相互、および参加者と本ファンクラブメンバーとの協働と会話交流が生まれた。

昼食・休憩の後、まず、宮原坑跡施設およびその周辺の近代化産業遺産の見学を実施、宮原坑跡巻揚機室、巻揚機、立坑やぐらとともに、宮原坑跡施設周辺の三池炭鉱鉄道敷跡、鉄道敷跡の上を通る

鋼鉄レール製造路橋梁ほか、周辺の遺構を見学した（写真2）。この見学では、当ファンクラブの解説だけでなく、参加である周辺住民の中から、「かつてはここに〇×があった」といった発言も聞かれた。

さらに、見学の後、一棟のみ保存された宮原坑跡施設脇の炭鉱住宅にてワークショップを開催した。そのテーマは「あなたが宮原坑跡とその周辺のオーナーになったら、何をどのようにしたいですか？また、何が出来ますか？」というもので、便宜上2班に分けて模造紙上に簡略地図を描き、そこに見学で気づいたことや提言を粘着性の付箋紙メモに簡単に書いて、貼り付け、地図を完成させ、発表する、というものである（写真3）。

このワークショップ地図作りを通じて、参加者相互および参加者とファンクラブ会員との対話と相互交流、意見交換の促進が図られたことを運営者として実感した。2つの班で出来上がったマップをもとに、現地の市民としての「声」をつぎのように集約できる。

- ・宮原坑の近代化産業遺産としての重要性の再認識と複数の景観眺望点の存在
- ・整備上の問題点（トイレ、ゴミ投棄、坑口復元と公園化、ベンチ設置、花で場を埋め尽くす、駐車場、道路、電線、バリアフリー化）
- ・整備上のアイデア（見晴台、鉄道敷跡の遊歩道化、案内板、ライトアップ、模型、上映会、スケッチ大会、櫓でバンジージャンプ？ほか）
- ・草刈イベントを続けて欲しい、また参加したいという要望

このようなワークショップ成果にみられる現地の市民の近代化産業遺産への親しみやある種の愛情を、さらなるワークショップ開催や草刈イベントの定着を図りながら、まさに地域住民や市民に寄り添いながら、NPO活動として、また、研究

者として現地の市民とともに近代化産業遺産の保存活用を主導していき、それらを行政等の保存活用計画に生かして行きたいと考える。これは、近代化産業遺産を擁する地域の生き残り方のひとつの可能性だと考えている。

おわりに

これまで述べてきたように、筆者は、近代化産業遺産の保存・活用を実践しながら、その実践活動そのものを研究している。

確かに、筆者の実践は、研究の一環として企図した活動というよりも、実践者として行なってきた活動を研究対象にしてきたという色彩が強い。しかし、実際には、フィールド系人文学の研究成果や思考方法をその活動の中に内在させているうえ、結果的に調査地の社会的・文化的状況を改変している意味においては、現地の市民に対する「調査地被害」の危険性を免れないことも事実である。

したがって、こうした実践は、どの研究者でも行なえるとは言いがたい。筆者自らがある種のネイティブである、という属性、現地の人々との絶え間ない意見交換、交渉、それから、「まちを元気にする」といったビジョンの組織内外での共有、こうしたものがあって初めて、足を踏み入れることの出来るものだと考える。しかしながら、こうした実践は、人類学において、とりわけ開発や地域に何らかの問題を抱えているフィールドにおいて、調査・実践地に対する立場とアプローチについての議論に貢献するものではないだろうか。例えば、関根久雄の指摘する「開発フィールドワーカーと人類学者との相互関係のあり方を「対話」と「協働」の視点から捉え」[関根 2007：364]、開発や地域における問題解決の際に生じる、現地の人々と開発フィールドワーカーと外部機関の三者それぞれに対して、「対話的役割と『つなぐ』役割の連続性において多様な形態・形式のもとで生み出さ

れる創発的な協働行為」[関根 2007：375]を人類学者が果たす際に、筆者のような立場とその実践の仕方も一つの参考になるものと考えられる。

<写真>



写真1 草刈の様子



写真2 レール製橋梁見学

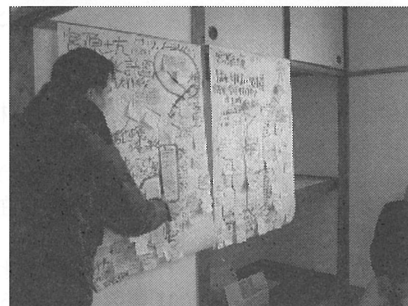


写真3 作成地図発表

註)

- 1) 本稿は、福岡工業大学環境科学研究所環境研究発表 2007(於：福岡工業大学、2007年3月10日)にて発表し、当該発表配布研究資料集に掲載された原稿「産業遺産活用型まちづくり」の実践と研究—大牟田・荒尾における地域社会環境創造のとりくみと学問—[永吉 2007a]、および産業考古学会 2007

- 年度全国大会（於：北九州市・九州国際大学、2007年11月10日）にて発表し、当該講演論文集に掲載された原稿「三池炭鉱の産業遺産の保存・活用について—研究者兼NPO活動家の視点より—」[永吉 2007b]を組み合わせ、大幅に加筆修正したものである。なお、上記2つの発表にて貴重なコメントをくださった方および発表機会を与えてくださった福岡工業大学環境科学研究所と産業考古学会にこの場を借りて謝意を申し上げる。
- 2) 「フィールド系人文科学」という名称は筆者の造語である。この造語の概念には、人文科学のみならず、社会学など通常は「社会科学」と認識されている学問分野も含まれている。また、この用語は各々の学問自体の境界をことさら強調し、弁別や差異の強調、差別化を意図するものではない。むしろ、人文科学や社会科学系で質的なフィールドワークを行う学問分野のゆるやかな総称としてこの語を用いたい。
- 3) 例えば、ノランは、開発人類学の文脈の中で、アカデミックな人類学／応用人類学／実践人類学をそれぞれの学者の雇用形態や活動状況から類型化しているが、ノランは「実践」を人類学の応用的実践、つまり人類学的知識や手法を用いて、応用的な領域に関する研究にとどまらず、応用を実際に行なう、という意味で使用している[ノラン 2007(2002):59-79]。関根久雄もフィールドワークにおいて起こりうる要素としての「協働」を応用的実践ととらえている[関根 2007:361-382]。また、こうした実践を”public anthropology”（公共人類学）の文脈の中でとらえようという視点も存在する[BOROFISKY 2006(online)]。
- 4) この点について客観的なデータを持ち合わせていないが、筆者が2001年頃から2006年頃までに出席した、大牟田市主催の複数の市民ワークショップにおいて、ワークショップのコーディネータである市当局者、およびワークショップを請け負ったコンサルタント業者や大学教官に向けて市民から発せられたことば等から筆者が感じ取ったことである。むしろ、筆者はすべてのフィールド系人文科学が「市民に役立つ研究」であるべきだ、と主張するつもりはない。ただし、一部には「市民に役立つ研究」もあってもいいのではないだろうか、と考えている。
- 5) 『文化人類学』72-2の特集においては、大学研究者が所属機関の近隣地域で実施する調査および「地域連携」実践が、『文化人類学』70-4の特集においては、人類学者のフィールドや実践への「関わり方」が、また、『民族学研究』65-4の特集においては、国内というフィールドと文化人類学の位置付けがそれぞれの特集の論点になっている。筆者にとってそれぞれに大いに参考になる論考群であるが、大学・研究機関の常勤職ではなく、特に特定の海外フィールドを持つわけでもなく、自身の生まれ育った地域における市民活動実践の当事者という側面が強いが同時に学術研究も行なっている、という筆者の立場はそれらの特集の位相とはやや異なっている。
- 6) 例えば鈴木紀は、「アカデミズムの内部にとどまり開発政策に起因する諸変化を記述分析する」[鈴木 1999:296]ような「開発の人類学」と、「開発援助期間へ直接関与し政策科学としての人類学を標榜する」[鈴木 1999:196]「開発人類学」の区別を紹介している。また、そうした開発に関わる人類学的な論考、とりわけ開発人類学の中は、開発に直接的に携わる研究者自身を描いた内省的なものも存在する。それは、公権力をいわゆる「ネイティブ」に行使する、あるいは公権力と「ネイティブ」を仲介する社会的役割として苦悩する研究者自身の姿を描き出した論考である。例えば筆者と同様、現地に関与する活動を自ら行なってきた安溪遊地[安溪 2006]やフィールドにおいて日本からのNGO活動を実際に仲介しながら分析した清水展[清水 2006]の論文もそうした内容である。
- 7) 研究者でありながらフィールドにおける実践家の代表的存在でもある宮本常一が「調査地被害」[宮本 1983(1972)]を著していることに注目したい。
- 8) いわゆる「フォークロリズム」の議論である。例えば[岩本(編) 2007]など。
- 9) 例えば、[宮本 1983(1972)]など、日本の村落社会調査などにおいても1970年代から指摘されつづけている問題である。
- 10) 三池炭鉱以外の事例として、山本勇次は、文化人類学および人文地理学的視点から、長崎県旧高島炭鉱に特徴的にみられる労働者文化、特に飲酒依存的な文化を描き出し

ている[山本勇次 1991]。確かに、三池炭鉱においても、危険度が高く肉体を酷使することの多い炭鉱労働からの精神的・肉体的解放手段として飲酒が広く用いられており、飲酒依存の者もかつては多くみられた。しかしながら、筆者が1993年頃に三池炭鉱閉山直前に三池炭鉱労働者とその家族を対象に実施した労働者生活史調査[永吉 1998]においては、飲酒および飲酒文化は参与観察的にも、あるいは労働者本人の発話からも、山本勇次が特筆しているほどには比重が置かれておらず、主に自宅で食事を兼ねて適量飲酒している程度であり、飲酒のみではなく、むしろ釣りやギャンブル(パチンコ・競馬等)も選好されていた。その要因は地理的要因、会社・労働者・労働組合間の関係の歴史の変遷(1960年の三池争議では労使対立の頂点を極めたが、閉山直前の三池炭鉱では労使協調路線組合員が労働者の大多数)、閉山の時期の相違、労働現場までの交通手段の相違(三池炭鉱閉山直前の坑口は有明坑であり主に自家用車通勤となり通勤中の飲酒が困難)、研究者およびその手法の相違等が考えられるが、少なくとも山本の描き出した高島炭鉱労働者文化を一般化して三池炭鉱の労働者文化にそのまま適用することは難しい。

¹¹⁾九州伝承遺産ネットワークサイトより。
<http://www.kyusyu-densyouisan.net/sekenisan.htm>

参考文献

BOROFISKY, Robert.

2006(online)Conceptualizing Public Anthropology. <http://www.publicanthropology.org/Defining/definingpa.htm> (2007年5月13日参照)

DICKS, Bella

2000 *Heritage, Place, and Community*. University of Wales Press.

SMITH, Laurajane

2006 *Uses of Heritage*. Routledge.

TICCIH

2003(online)「ニジニータギル憲章
TICCIH 産業遺産憲章の暫定日本語

訳全文」宇野いつ子(訳) :

http://www.ricoh.co.jp/net-mesena/ACADEMIA/JIAS/NIZHNY_T_charter.html (原文: The Nizhny Tagil Charter for the Industrial Heritage. <http://www.mnactec.com/TICCIH/industrial.htm>) (2008年1月15日参照)。

WALSH, Kevin

1992 *The Representation of the Past: Museums and Heritage in the Post-Modern World*. Routledge.

アーリ、ジョン (URRY, John)

1995『観光のまなざし』加太宏邦(訳) : 法政大学出版局 (*The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. Sage, 1990)。

安溪 遊地

2006「フィールドでの「濃いかかわり」とその落とし穴—西表島での経験から—」『文化人類学』70-4 : 528-542。

井上 敏、野尻 亘

2004「産業考古学と産業遺産—何のために情報を収集し、誰に伝えるために保存するのか—」『桃山学院大学総合研究所紀要』30-2 : 61-90。

岩本 道弥(編)

2007『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館。

大牟田市石炭産業科学館

(リーフレットのため正確な制作年不明、2000年以降) 「大牟田近代化遺産MAP」。

大牟田市役所主査・主任会(編)

2002『大牟田の宝もの100選』海鳥社。

岡田 浩樹

2004「民俗文化の活用と地域おこし「の」人類学、人類学「の」民俗文化の活用と地域おこし」

- 『文化政策・伝統文化産業とフォークロリズム—「民俗文化」活用と地域おこしの諸問題—』(課題番号 13410095) 平成 13～15 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書 <研究代表者 岩本通弥> 159-164。
- 荻野 昌弘(編)
2002 『文化遺産の社会学—ルーヴル美術館から原爆ドームまで—』 新曜社。
- 加藤 恵津子
2006 「日本人・ネイティブ・人類学徒—劣等感も選良意識も超えた自文化研究に向けて—」『文化人類学』 71-2:202-220。
- 加藤 康子
1999 『産業遺産』 日本経済新聞社。
2007 「日本の近代化遺産と世界遺産」『地理』52-12:51-61 古今書院。
- クラパンザーノ、ヴィンセント
(CRAPANZANO, Vincent)
1991 『精霊と結婚した男』 大塚和夫、渡部重行訳：紀伊國屋書店
(TUHAMI: Portrait of a Moroccan. Chicago Press, 1980)
- クリフォード、ジェイムズ
(CLIFFORD, James)
1981 「レナルトと民族誌学—フィールドワーク・互酬性、民族誌学的テキストの作成—」橋本和也訳『現代思想』9-12:166-181:青土社。(Fieldwork, Reciprocity, and the Making of Ethnographic Texts. *Man*15:518-832, 1980)
- 2003 『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信、慶田勝彦、清水展、浜本満、古谷嘉章、星埜守之(訳):人文書院。(The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art. Harvard University Press, 1988)
- 経済産業省
2007(online) 『近代化産業遺産群 33—近代化産業遺産群が紡ぎ出す先人たちの物語—』 経済産業省 (http://www.meti.go.jp/press/20071130005/isanun.pdf) (2007年12月1日参照)。
- 幸田 亮一
2006 「熊本・九州の産業遺産をめぐる動向と課題」『熊本学園大学産業経営研究』25:1-14。
- 斉藤 尚文
2000 「文化人類学の開発と実践—文化人類学の開発のために—」青柳まちこ(編)『開発の文化人類学』21-37 古今書院。
- 清水 展
2006 「歴史をふまえて未来を開く国際協力—北部ルソン先住民イフガオの村と丹波の小さな NGO をつなぐ草の根の交流—」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』8:356-371。
- 鈴木 紀
1999 「「開発人類学」の課題」『民俗学研究』64-3:296-299。
- 砂田 光紀(監修:国土交通省九州運輸局、九州産業・生活遺産調査委員会)
2005 『九州遺産—近現代遺産編 101』弦書房。
- 関根 久雄
2007 「対話するフィールド、協働するフィールド—開発援助と人類学の「実践」スタイル—」『文化人類学』72-3:361-382。
- 田辺 繁治
2003 『生き方の人類学—実践とは何か—』 講談社。
- 鶴見 和子
1989 「内発的発展論の系譜」 鶴見 和

- 子・川田 侃(編) 『内発的発展論』 43-93 東京大学出版会。
- 中西 裕二
2003 「私は人類学者なのか? — “日本の文化人類学” という制度を考える —」 『福岡大学人文論叢』 35-1 : 1-30 福岡大学。
- 永吉 守
1998 「ライフ・ヒストリーにみる炭鉱労働者像—閉山間近の三井三池炭鉱労働者の「語り」より—」 『熊本大学文化人類学調査報告』 2 : 1-96。
2003 「エコミュージアム型産業遺産保存・活用のNPOの実践と研究」 『九州人類学会報』 30 : 28-39。
2007a 「「産業遺産活用型まちづくり」の実践と研究—大牟田・荒尾における地域社会環境創造のとりくみと学問—」 平成 18 年度福岡工業大学環境科学研究所環境関連活動報告会投稿論文(『報告会資料』として論文掲載)。
2007b 「三池炭鉱の産業遺産の保存・活用について—研究者兼NPO活動家の視点より—」 産業考古学会 2007 年度全国大会(北九州)一般公演論文(『講演論文集』に掲載)。
- 西山 徳明・池ノ上 真一
2004 「地域社会による文化遺産マネジメントの可能性」 『国立民族学博物館調査報告』 51 : 53-75。
- 日本文化人類学会(編)
2006a 『文化人類学』 70-4 (<特集>表象・介入・実践：人類学者と現地とのかかわり)。
- 日本文化人類学会(編)
2006b 『文化人類学』 71-2 (<特集>日本のネイティブ人類学)。
- 日本民族学会(編)
2001 『民族学研究』 65-4 (<特集>「人類学 at home」—日本のフィールドから—)。
- ノラン、リオール (NOLAN, Riall)
2007 『開発人類学』 関根久雄、玉置泰明、鈴木紀、角田宇子(訳) : 古今書院 (*Development Anthropology*. Westview Press, 2002)。
ブルデュー、ピエール (BOURDIEU, Pierre)
1988, 1990 『実践感覚』 1・2 今村仁司、港道隆ほか(共訳) : みすず書房 (*Le Sens Pratique* : Les Éditions de Minuit, 1980)。
文化庁(online)
「文化遺産オンライン」
<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>
(2007年12月18日参照)。
- 宮本 常一
1983 「調査地被害—される側のさまざまな迷惑—」 『宮本常一著作集』 31 未来社 (原著: 1972 『朝日講座・探検と冒険』 七 朝日新聞社)。
- 毛利 嘉孝
2002 「ヴァーチャリティ—オルタナティブな公共圏をつくりだす—」 『現代思想』 30-6 : 198-217。
- 矢作 弘(著)
2004 『産業遺産とまちづくり』 学芸出版社。
- 山本 真鳥
2006 「序—ネイティブ人類学の射程—」 『文化人類学』 71-2 : 196-201。
- 山本 勇次
1991 「高島炭鉱社会に見る「炭鉱文化」と「飲酒依存性」」 守山 正樹(編) 『炭鉱閉山の島から学んだこと—長崎県高島における学際的地域研究の試み—』 19-72。
- 山本 理佳
2006 「近代産業景観をめぐる価値—北九州市の高炉施設のナショナル／ローカルな文脈—」 『歴史地理学』 48-1 : 45-60。
(2008年5月23日採択決定)